

# 私の SA 体験

My SA Experience

島田 祐亮

## 1. はじめに

社会情報学部での講義では、パソコンを使用した実習形式の講義が存在する。だが、履修人数が 50～100 名と大人数であることと、パソコンを使用して課題を解くというのはかなり時間がかかる上、インターネットが接続できないというようなパソコンを使用する上で様々なトラブルが生じる。そういったトラブルが同時に多発した場合、教員一人に対応するのは難しい。そこで、社会情報学部では本学や情報関係の他大学の大学院生からティーチング・アシスタント（通称 TA）を募ると同時に、社会情報学部生からスチューデント・アシスタント（通称 SA）を学生アルバイトとして募集し、TA 2～4 名、SA 4～8 名と担当教員で学生のパソコン実習を指導していくという形式を取っている。

今回、私は後期に開講された、高田洋先生の「データ解析 I」というパソコン実習の講義で SA として勤務させていただき、1 週も休まずに無事に勤務期間を終えることができた。そして、注目していただきたい点は「車椅子である上、言語障害を持つ身で SA 業務を勤めた」ということである。つまり、障害学生としては今回初めて SA を勤めたということである。これは、社会情報学部 16 年の歴史上初めての出来事ということになり、社会情報学部としても、本学としても後世に語り継いでもらいたいので、報告書にして残したいと思い、今回執筆させていただいた。以下

に書かれる事柄は、全て事実なので最後まで読んでいただければ光栄である。

## 2. 動機～なぜ SA になりたかったのか

そもそものきっかけは 3 年の前期である。たまたま情報ポータルを見て「後期 SA 募集の案内」と言う教務課からのお知らせを目にした。最初は「車椅子だし言語障害だから自分には関係ない」と思っていたが、興味本位で添付された募集要項を見てみると「データ解析 I」という講義で SA を募集しているということが書かれていた。データ解析という講義は、私にとって特別なものであった。社会調査士資格取得を目指していたので資格取得のための必修科目であったし、正直言うと 1 年の頃の必修科目だった「データ解析基礎・同演習」は苦手教科でもあった。しかし、2 年の「データ解析・同演習」という講義を取ったとき、なぜかわからないが、楽しくなり、得意になった。おそらく、分析の仕方を当時の TA から丁寧に教えられ、回数を重ねるごとに上達して褒められるようになったのが、データ解析を好きになったきっかけだと思う。

3 年になり、データ解析の講義がなくなって少し物足りないと思った矢先、先ほど述べたように教務課の案内で「データ解析 I」の SA 募集を見た時、「教える立場でデータ解析という学問を勉強するというのも悪くはないか」と思ったのと、分析には多少自信があったこと、そして何より『大学時代に 1 度でも

いいから、どういう形でもアルバイトをして「働く」ということを経験しておきたい』ということを動機に SA に募集することを決意した。

### 3. 採用されるまでの経緯

さすがに何も考えずに SA に応募するわけにはいかなかった。冒頭で述べた通り私は「車椅子の上言語障害」であるがゆえ、SA 勤務をしていくのに非常に条件が厳しい。それは誰よりも自分自身が重々わかっていたことであり、障害というハンディを承知で応募に望むわけだったので、応募する前に一回教員に相談する必要があると思い、専門ゼミナール担当教員の小内純子先生に一言相談した。すると、「高田先生を中心に、新國先生や他の社会情報の先生と相談してみます。」とおっしゃってくださったので、2週間ぐらい連絡を待った。なかなか連絡が来なかったのでこちらから連絡すると、『SA の件ですが、高田先生いわく「ちょっと難しい」ということでした。ただ、応募してみてもいいということでした。とりあえず、SA になって何ができるのか積極的に動いてみましょう』という返事をいただいた。すると私はすぐ応募書類を書き上げ、7月某日、小内先生に印鑑を押しもらい、ゼミの休憩時間に教務課へ行き、応募書類を提出した。ここで仮に採用されなかったとしても、「働く」という行為を実現するためにしなければいけないプロセスを経験できただけでも価値があると思い、「ダメで元々」という覚悟で応募書類を提出した。

後日、用事があって教務課に足を運んだ時、職員の本木さんから「SA のことだけど、おそらく採用となると思います」と告げられた。それを聞いて嬉しくなり、数日後の正式発表の日を待った。そして当日、情報ポータルを開いてみると教務課から連絡があった。「あなたは後期開講される「データ解析 I」の SA に採用されました。」という内容だった。こうし

て私は「データ解析 I」の SA として勤務することとなった。7月下旬の暑い夏の休日の出来事であった。

### 4. 実際に SA として働いてみて

後期になり、最初の水曜日の10月4日、待ちに待った最初の SA 勤務の日。昼休み終了間近に教室に行き、教壇近くにいる TA・SA の待機場所に行った。すると TA に「受講する学生？ 席について」と言われ「いえ、SA なんです。」と答えた。「あ……そうですか……」と少し戸惑っていた様子だった。どうやら今回障害学生が SA を勤めることは聞かされていなかったらしい。高田先生がなかなか来ないので、先生の研究室へ向かった。C館5階に行き、研究室へ行く途中で先生とすれ違った。「あ、島田君。今回僕の講義の SA をやるんだよね？」「はい」「……実は君の業務内容を考えてなくてね……。そうだな、君、ホームページとかいじれる？」「あ、ええまあ……」「そうか……。とりあえず、後で業務内容を考えることにして、今日は教室で待機してください。」「はい」というわけで1回目は教室待機することとなった。この辺りは夏休み中に予め連絡を取り、打ち合わせしたほうがよかったと反省している。

教室で待機していて、他の SA・TA の仕事ぶり、講義の様子を見て、自分でもできることはないか、考えていた。すると、講義中で課題を終わらせることは非常に困難であることが状況を見てわかり、時間内にできなかった学生の課題を見てみることなら、メールでのやりとりというコミュニケーション上有利な状況に持ちこめるという考えに至って、講義終了後、高田先生に相談した。すると、「島田君自身が課題を解いてわからないことを報告したらどうか」と言われた。確かに、学生の宿題を見るより、私自身が課題を解き、わからないことを報告した方が、講義の質を高められるし、SA でもわからないことを中心

に解説していくようにすれば、多くの学生にわからないところがわかりやすくなり、自ずと時間内で課題を終わらせられる学生が多くなるので講義に貢献できると思い、先生の提案を受け入れた。

その週の金曜日、2回目の講義内容と課題がeメールで送られてきた。しかし、ここで大きな問題がある。データ解析で使用する統計ソフト「SPSS」は学内でしか使用できない。しかも、その週の土・日・月曜日は大学祭で休講であった。だが、私に割り当てられた唯一の仕事であるため、日曜日に学校まで足を運び、空き教室で課題に取り組んだ。課題自体はまだ2回目なので、1時間もあればできるのだが、ネットワークの不備もあり、気がつけば4時間かかって課題を完成させた。そして、2行か3行ぐらいコメントを加えて先生に完成した課題を送った。2日後、先生からメールが返ってきて、「課題に関する理解がよくできていて、とてもよいと思います。コメントも参考になるものです。この調子でやっていきましょう」とお褒めの言葉をいただいた。とても嬉しくなって、他の学生がお祭り騒ぎしている中で一人ひたすら仕事をした甲斐があったと達成感でいっぱいになった。以後、毎週時間がある時に課題を解くようにし、講義前日には回答データを送るように心がけた。後に、メーリングリストを高田先生に作っていただいて、他のSA、TAにも見てもらえるようになった。

3回目ぐらいになると、コメントの参考のため、教室内を回るようになった。そして、ふとしたきっかけでノートパソコンを膝に置き、気がついたら私も学生に教えていた。言葉は案外通じやすく、どうしても通じない時はパソコンで伝えたいことを打ってそれを見せて伝えた。こうすることでスムーズにコミュニケーションを取れるようになり、私もしっかりと教えていけるようになった。しかし、教室内は後の席が段差になっていき

すがにそこにいる学生には教えられなかった。ただ、車椅子が移動することによって他のSA・TAの移動に支障が出るわけではなかったので、3回目以降は最終日まで教室を自由に回って教えることができた。学生は皆私の言葉に耳を傾けてくれて、知ったかぶりをされたり、無視されたりということはなく、気持ちよく教え回ることができた。先生や他のSA・TAも私が教え回ることについては容認してくれていたようで、気がつけば講義終了後「お疲れ様です」と声をかけられるようになっていた。

## 5. 最後に

くどいようだが、今回、私が初めて障害学生としてSAを務めたが、初めてにしては予想以上の大成功を取めたと思う。その背景には、SAに応募する時に事前に相談に乗り、社会情報学部の教員の皆様に相談するなどいろいろ働きかけた小内先生、私がSAになりたいということを親身になって相談に乗ってくださった新國先生を始めとする多くの社会情報学部の先生方、そして、快く私をSAとして採用してくださった高田先生、私を同僚として認めてくれた他のSA・TAの皆様のおかげである。多くの方の支えの中で取められた大成功といっても言い、皆様には「ありがとうございます」と何度も言っても言い足りない感謝の気持ちでいっぱいである。

後は、今回初めてSAになり、業務としては、課題を解いてコメントを書くのと、教室内で車椅子が移動できる場所で教え回ったという仕事を担当したが、もっと考えれば他にもいろいろな業務ができたような気がする。例えば、課外指導ということで、残った課題をメールのやり取りで指導したり、データ解析以外の講義だったら「情報処理基礎」でテキストの問題が簡単すぎて全部終わった学生はWord・Excle 3級・2級の問題をコピーして配ってやらせたり、直接教えるだけ

でなく、事務的な業務を取り入れていけば講義の質を高めることができるし、いろいろな業務内容があってもいいと思う。これについては、機会があれば来年度他の講義でSAになったら考えていきたい。最後に一言言いたいのは、今回の件で障害学生でもSAができるということが証明されたので、2年後、3年後と障害学生が社会情報学部に入學し、その学生が「SAをやってみたい」というふうになったら今回のことを例にして、考えてほしい。決して「車椅子だからSAはできない」と門を閉ざしてほしくないし、障害学生本人も卑屈になってほしくない。これはSA以外にも言えることで、やりたいことがあるのなら

まずはゼミの先生や身近な頼れる人に相談する。何をやるにしてもこれが重要なのではないかと思う。

## 付記

本報告は、皆川雅章学部長からの勧めで、『2006年度札幌学院大学バリアフリー委員会文集』（2007年2月3日発行）に掲載された原稿を一部字句訂正の上、バリアフリー委員会および著者の許可を得て投稿したものである。

（札幌学院大学バリアフリー委員会世話人代表 新國三千代）